魔王様と侍女

蒼月 かなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様と侍女

【Nコード】

N3127U

【作者名】

蒼月 かなた

【あらすじ】

魔王陛下と侍女。その日常のお話。

私の名前はシエルフィアラ。魔王様の侍女です。

「シエル。聞きたいんだが何をどうすれば紅茶がこんな禍々しい色になるのだ」

今日もお美しい漆黒の魔王陛下が眉間に皺を寄せて私にお聞きになる。

「さあ。今日も普通に入れたんですが？何故ですかねえ」

不思議なもので、私に入れる紅茶は何回かに一回、不思議 飲んだら死んじゃうぞ？な物体に変化する。

私の主である魔王陛下はその紅茶をバルコニーにある魔界草（注：猛毒。にお掛けになった。

じゅわーッと音を立てて魔界草がしおれる。今回は溶けなかったか。

「こんな危険なものを俺に飲ませようとは相変わらずいい度胸だな」

「だって、陛下絶対飲まないじゃないですか。安心安心。私にも何が起るか分からないので実はちよつと楽しみで」

えへつと笑って見せたら拳骨でこめかみをグリグリされました。

「酷いです陛下っ！！ちよつとした可愛いイタズラみたいなものじゃないですか。心が狭いですよ？魔王陛下とあらせられるお方が侍女の失敗の一つや二つっ……………！！！！」

「失敗が一つや二つ程度ならな？なんでお前は普段優秀なのに時々こういう事になるんだ??？」

大仰に溜息を吐かれました。酷いなあもう。こればかりは私の体質のようなものだしと言えない。普段は陛下がおっしゃったように優秀な私だが、時々紅茶だけでなく、掃除し終わってみたら部屋がスライムだらけになっていたとか呪いのようなスキルが発動するのだ。えへん。

「さあ？私が聞きたいぐらいです」

私分からないって知ってるはずなのに陛下は毎回こうおっしゃる。まあ、たいてい被害に会われるのが陛下だから仕方がないのかも知れない。普段、氷のように冷酷な陛下とのスキンシップが取れる貴重な時間だ。しかし、何故私が殺されないのかはいつも不思議。陛下が、多少なりともこのやり取りを楽しんでいらっしゃるという事だろうか。

そんな魔王様と私の出会いは、私が覚えていない位幼少の頃。魔界に捨てられていた私を魔王様が発見 子供にもちろん興味があるはずもなく見捨てて行こうとした所、しがみついて離れなかつたらしい。魔王陛下にしがみ付くなんて恐れ多い事、良くやったな幼い頃の私。普通なら、そのまま殺していたらしいその状況でたまに機嫌のよろしかった陛下にお持ち帰りされて今に至る。機嫌がよろしくてヨカッタデス。それにしても魔界に捨てられた人間なんて私くらいのもんじゃないだろうか。

今のところ、魔王様にも情というものがあつたのか無事に成長出来てますが飽きたら殺されるんだらうなあ……遠い目。この前の愛人奴隷4598号さんのように。あれは酷かった。魂ごと消し飛ば

しちゃうんだもん。あれじゃ転生もままならない。ちょっと前までお気に入りだったのになんでだろう？

シエルは今日もやらかしてくれた。この俺を殺す気なのかと思いたくもなるが、この娘は天然で悪意が全くない。この陰謀渦まく魔窟で稀有な事だ。毒されずに良く育ったものだと思う。

正直に言おう。最初は殺そうと思った。しかし、拾った時に俺の魔眼を正面から見据えて正気を失わなかった子供に興味を覚えた。何よりも誰からも怖ろしいと言われるこの俺の目を睨みつけてくる根性が気に行ったのだ。

思えば昔からコイツはふてぶてしかった。仮にも魔王であるこの俺に「さあ」とか「でも」とか言えるのはシエル位のものだ。他の物は俺の顔色を窺う事に必死か寝首掻こうとしているかのどちらかだ。他の者が同じシエルと同じ物言いをしたら確実に殺してる。それ位には俺はシエルの事を気に入っている。

この前なんぞ奴隷4598号が自分の立場の何を勘違いしたのかシエルを殺そうとしていたので思わず魂まで消滅させてしまった。シエルは俺の持ち物であって間違っつて害していいものではない。

「陛下、陛下見て下さい!!!新記録。今日は短時間で2回目ですよ?!」

「だから、俺の所に持って来なくていいだろうそんな禍々しい臭気を放つ物体を」

今度はロールケーキがカオスになりました　なんだかスライムと目玉がごちゃ混ぜになった感じです。
辺りには何とも言えない刺激臭。

陛下はこの皿を持つと部屋の隅にあるなんでも食べる魔界の怪魚ダ
ルロツサの（注：指を入れないください喰いちぎられます。の水
槽にロールケーキをお入れになった。
びっちびちと喜んでロールケーキに喰らいつくダルロツサ。お、今
回は平気かな?と思ったら逆さに浮いて骨になりました。

「陛下………ちょっと可哀想です」

「ほう。お前はその可哀想な状況に俺がなっても良かったと?」

「だって陛下食べないじゃないですか」

にっこり笑って言った『それを言うのはこの口か』と言われて頬
つぺたを思い切り掴まれて引っ張られました。

「いひゃいです〜陛下あ〜」

「当たり前だ。痛くなければ仕置きにならんだろうが（怒」

まったくお前は何度も何度もと言われながら引つ張られます。うー痛い以前に顔が伸びそうです！！かーおーがー！！やっとなんて頂けた所、頬がジンジンして触ってみれば熱を持っていました。

「大人げないですッ陛下！！650才にもなつて！！人間でかわい乙女の顔が伸びきって戻らなくなつたらどうしてくれるんですか」

痛む頬を抑え涙目になってそう言えば、何とも言えない顔の陛下と目が合いました。

「寝言は寝て言え。乙女になりたかつたらもうちょっと育てから言っただな」

「正確な年齢は分かりませんが陛下に引き取って貰って16年経つんですよ？ですから十分乙女です」

ぶんむくれて言えば首をかしげてマジマジと顔を見られました。

「そんなになるか？まだまだ子供だと思つてたんだがな？？」

何故でしょうか。蛇に睨まれた蛙の気分です。

「ふっん」

上から下まで見られてどつと冷や汗が出てきました。あれおかしいな？私何か地雷を踏みましたか？

「なら、これからは乙女とやらの対応をしてやるっ」

なんか舌舐めずりしてませんか。陛下？陛下？！なんです？？？この捕食者に捕まった気分！！！！

「やっぱり……………遠慮しておきます。なんか私はまだ乙女には程遠い……………」

「遠慮する必要はない。もう決めた」

陛下？！陛下？！！決めたって何をですか？？一体何を決めたって
いうんです！！！！

怖くてその先は聞けませんでした。

上機嫌で去っていく陛下を見守りながら私はその場に座り込んだ。
この後、私どうなるんでしょう？？？

(後書き)

シエルフィアラ捕食されるフラグが立ちました。頑張り。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3127u/>

魔王様と侍女

2011年6月24日08時38分発行